

第7分科会

岐阜市立陽南中学校



所在地
校 長
生徒数
連絡先

〒500-8353 岐阜市六条東1-1-1

青木 廣志

563名(19学級)

TEL 058-274-0055 FAX 058-274-0083

E-mail gichu16@younan-j.gifu-gif.ed.jp

URL <http://cms.gifu-gif.ed.jp/younan-j/>

【研究主題】

運動技能の高まりを実感し、

仲間と共に運動に親しむ生徒の育成

1 研究の概要

(1) 研究主題

大会主題である「生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む資質や能力を育てる体育授業」を受け、中学校部会では、研究主題を「できた喜びや仲間と共に運動する楽しさを味わう体育授業の創造」とし、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てることを願う研究を進めている。

第7分科会では、研究主題を「運動技能の高まりを実感し、仲間と共に運動に親しむ生徒の育成」とし、県の研究実践に示された研究内容① 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成と、③ 技能の向上に結び付く思考・判断を高める工夫に焦点を当てて研究を進めることとした。

研究主題にあげている「運動技能の高まりを実感」させることで、満足感や充実感を得られ、次の運動への意欲につながると考えた。そこで、毎時間の学習課題や指導内容を明らかにするため、運動の上達する過程を「様相と姿」でとらえることや種目のもつ技術内容を構造的に分析することで、基本的な指導過程や単元の指導計画の作成に取り組んできた。

また、上達していく過程の中で生じる技術的な「つまずき」を予想し、解決の手掛かりを提示し、生徒の状況に合ったものを選択させたり、改善ポイントを見付けさせたりするなどの活動を通して、思考・判断を高め、意欲的に取り組むことができると考えた。

第7分科会では、運動領域として「ダンス」を取り上げ、「創作ダンス」と「現代的なリズムのダンス」の内容について研究を進めることとした。現行の学習指導要領では、「ダンス」はすべての生徒に履修させることになっている。男子の履修については、他の領域に比べて運動技能の高まりを実感しにくく、苦手意識をもつ生徒も少なくないことから、その指導の在り方について課題を抱えている。今回の実践が、男子の「ダンス」領域の取り扱いに少しでも参考になることを願っている。

研究主題にあげている「仲間と共に運動に親しむ生徒の育成」は、中学校部会の研究主題で述べている「仲間と共に運動する楽しさ」と同様の趣旨で取り上げられている。これは、岐阜県の中学校体育において、体育の授業過程を運動に関する学習過程と学習集団の相互作用の過程としてとらえられているからである。つまり、体育とは、「集団による運動を高めるための学習であり、運動を通して集団を向上させるための学習である」ととらえ、グループでの学習は、単なる方法としてではなく、学習内容として位置付けている。岐阜県のこれまでの研究成果を生かし、運動面の指導と関係づけながら、個の態度を高め、学習集団としての質を高めていくこととした。

(2) 研究仮説

運動が上達する過程を踏まえた基本的指導過程を作成し、運動技能の向上に結び付く段階的な指導をするとともに、運動技能や学習集団の質の高まりを実感することのできる評価をしていけば、主題に迫ることができる。

(3) 研究内容

- ① 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成
ア 「現代的なリズムのダンス」「創作ダンス」の基本的指導過程の作成
- ② 技能の向上に結び付く思考・判断を高める方法の工夫
ア 運動技能の向上に結び付く段階的な指導
イ 運動技能を高めるためのドリル練習
ウ 運動技能や学習集団の質の高まりを実感させる評価の在り方

2 公開授業

(1) 第2学年 体育理論「運動やスポーツが社会性の発達に及ぼす影響」

授業者： 茨 勇作 教諭

① 興味・関心を高める導入の工夫

- ・ 本單元では、生徒にとって身近なもの（メディアでよく見るもの、スポーツテストや保健室の利用状況など）を取り上げ、意欲的に学習することができるように導入を工夫した。
- ・ 本時では、誰もが知っているフェアプレーのよさや規定のルール（反則の回数や基準など）など、運動やスポーツに興味をもてるように疑問を投げかけ、「確かにそうだ。どうしてだろう？」と興味・関心を高めることができた。

② 運動やスポーツのねうちに気付かせる指導

- ・ フェアプレーの精神と規定のルールの葛藤を繰り返し、フェアプレーの精神に少しずつ傾くことでスポーツマンシップが高まっていくことに気付かせる。スポーツマンシップが高まることを、3つの要素（規定としてのルール・フェアプレー・スポーツマンシップ）を構造的に示すことで理解させた。
- ・ 運動やスポーツをすることで、決められたルールを守ったり相手のことを考えたプレー（フェアプレー）をしたりすることを繰り返し体験することができるから、スポーツマンシップが高まる。そのことを理解させ、次からの運動やスポーツへの意欲につなげていこうとする意識を高めることができた。

(2) 第3学年 ダンス「現代的なリズムのダンス」授業者： 竹中 聖文 教諭

① 発達の段階を踏まえた指導計画の作成

- ・ 生徒の多くがダンスの経験が十分でないことを踏まえ、リズムの取り方や動き方等を視点とした基本的指導過程を作成した。踊ることへの恥ずかしさや抵抗感を軽減するために、簡単な動き方や使う身体の部位を示した。また、体幹を使ってリズムに乗る感覚をつかめるように、リズムの取り方を習得する時間を継続的に位置付けた指導過程を設定した。

② 自ら学習できる学習過程や学習形態の工夫

- ・ 単元の始めや、授業の始めには2人～数人で身体を動かす活動を位置付け、互いのまねや動きの繰り返しなど、簡単な動きを取り入れることで心の解放をねらった。また、固定した人間関係を崩すため、毎回違う仲間との活動とし、どの仲間との組み合わせでも生き

生きと活動できるようにした。

- ・ 本時では、これまでの学習で創ってきた踊りをよりダイナミックにするための動きのポイントを示し、その動き方を練習した。また、グループ内で2人組をつくり、互いの踊りを見合ったり、リーダーが全体の動きを確認しながらアドバイスしたり、タブレット端末を使用し、撮影した物を見合って活動できるようにしたりしたことで、主体的に活動を行うことができた。

(3) 第3学年 ダンス「創作ダンス」

授業者： 鈴木 健仁 教諭

① 発達の段階をふまえた指導計画の作成

- ・ 創作ダンスにおける技能の発達に、「心の解放」が大きく関わっていると考え、意識と技能の関わりを明確にして指導計画を作成した。生徒の意識は、「体を目一杯動かして楽しい→イメージに合った踊りができうれしい→よりイメージを表わす工夫をすることができ満足」と変容すると考え、身に付けさせたい技能内容である「誇張して大きく動く、ひと流れの動きで踊る、ひとまとまりの表現で踊る」と関わらせて指導した。

② 自ら学習できる学習過程や学習形態の工夫

- ・ 各グループにタブレット端末やCDデッキを準備し、生徒が自ら学習を進めることのできる環境づくりを大切にした。また、自分の課題を明確にできるようにホワイトボードに本時の学習課題を書くことで、仲間からもアドバイスをもらい、グループで課題解決に向けて学習ができるようにした。
- ・ 授業の展開では、即席の集団を形成し、即興的に踊る場面と、グループの追求テーマに向かってじっくりと小作品を練り上げる場面を設定し、ねらいを明確にして十分な活動時間を仕組むことができた。

3 研究協議

- (1) 提案 司会者： 原川 拓雄 教頭
発表者： 茨 勇作 教諭

<本校の主張・提案>

① 基本的指導過程の作成

- ・ 運動技能を高めるための具体的な指導内容を明確にするために、運動技能の発展を様相や姿でとらえた。
- ・ 次の様相(段階)へステップアップするには、どのような指導をする必要があるのか、指導する技術内容はどのような構造になっているのかを分析した。

② 思考・判断を高める指導

- ・ 生徒は、課題意識をもって練習に取り組み、その課題の達成ぶりを振り返るというサイクルで思考判断を高めていくので、次の3点の指導を位置付けた。

- ・ どのような課題を設定すれば技能向上に結び付くのか、課題の設定の仕方をより具体的に、より明確になるよう指導した。
- ・ 実践の場面では、ドリル練習を位置付けた。うまくなるコツ(技術ポイント)を意識し練習するとともに、仲間と練習を見合って、どのようにすればうまくなるのかを考えながら高め合わせていった。
- ・ 振り返りでは、課題の達成ぶりを確かめ、課題解決のために選んだ方法が適切であったかどうかを評価し、次への課題をつくるというサイクルを大切にした。

③ 仲間と共に運動に親しむ生徒

- ・ グループのめざす姿を確認し、振り返りを行う。その際、学習のきまりの守りぶりを視点として振り返らせる。
- ・ 計画－実践－反省のサイクルを繰り返し行うことによって、学習集団としての高まりを実感させる。質の高い学習集団であれば、教え合いが活発になったり、前向きに学習に取り組んだりすることが増える。

(2) 協議内容 (□…質問・意見・感想)

※ 回答は、授業者(茨 教諭, 竹中教諭, 鈴木教諭)

□ どのような段階を踏んで指導しているのか。

A 生徒の意識や運動技能の段階を踏まえ、指導時間や単位時間の指導内容や指導方法を明らかにして指導に当たった。創作ダンスでは、「体を目一杯動かして楽しい→イメージに合わせた踊りができてうれしい→よりイメージを表わす工夫をすることができて満足」と生徒の意識が変容すると思った。それに伴って各段階で課題となる生徒の意識は、「周囲の仲間の目が気になる→動き方が分からない→イメージを表現するためにどう工夫してよいか分からない」ととらえている。そのため、単元開始直後には踊りを踊る活動ではなく、ゲーム感覚で楽しく体を動かす活動を行った。緊張をほぐすための運動を多く取り入れ、その中で様々な動きを肯定的にとらえて指導したことによって、学習集団に安心感が生まれ、心が解放されたと考える。また、1・2年生では動きづくりを、3年生ではテーマの表現を重点として指導を行った。発達段階に応じて指導することを大切にしている。

□ どうしてそこまで踊れるようになったのか。

A 一単位時間の流れを具体的に指導し、生徒が主体的に授業に参加できる環境を整えた。例えば、授業開始前の5分間を生徒自身が自分たちの踊りを高めるために使うように仕組んだり、ドリル練習で互いにアドバイスをしながら思考・判断を高めていける場を設定したりした。また、テーマを設定し、そのテーマに向かって「こんなふうに表現したい」「見ている人に訴えたい」と生徒に願いをもたせることで、生徒の主体性を高めていった。ドリル練習でダンスの技能を高めること、テーマを表現する活動に意欲的に参加すること、そのような指導の積み重ねによって、授業開始前に素早く集合する姿や生き生きと活動に参加する姿を創り上げることにつながった。

□ 評価で大切にしていることは何か。

A 一貫した視点をもとに授業では「自己評価」「相互評価」「教師評価」の三つの評価を行った。ICT機器（タブレット端末）の活用することで、自己の運動に対して自分の課題意識と照らし合わせて評価をしてきた。また、授業の終末に発表会と相手に対して意見を伝える機会を位置付けることにより、仲間からの意見をもとに自分の技能を見つめさせた。単元の序盤では、仲間からの声で自信をもって活動できるようになる生徒が多く見られた。教師評価では、専門的な言葉や技能が高まった理由を、VTRなどを用いて具体的に話すことで、その誉められた生徒の真似をしようとして周囲の仲間の技能も高まった。本時の授業では、約8割の生徒が評価規準を達成したと捉えているが、学習カードの記述も含めて適切に評価をしたいと考えている。

□ 男女別習で学習している意図は何か。

A 生徒に男女別履修についての意識調査を行ったり、運動の実態を調査したりしたところ、男女でそれぞれの特性が表れた。男子は、よりダイナミックに、よりテーマに沿って追求する気持ちが強かった。女子は、みんなでそろって踊ることに喜びを感じるようになった。それぞれの特性を生かした授業展開をするためにも、男女別習で学習を展開した。今後、男女共習の授業展開で生徒がどのような意識で取り組むのかなど、生徒の男女共習についての意識や実態をつかんで判断できるように実践を検討していきたい。

(3) 指導講評 指導助言： 岐阜大学教育学部准教授 熊谷 佳代 先生

授業を実施するうえで、「笑顔」を作り出す工夫を大切にしてほしい。特にダンスなどの表現を大切にする単位では、自分を開放できる場の設定がないと成立しない。座学の授業でも、同じだと考えている。

【体育理論について】

「楽しむだけではスポーツではない」という前提のもと、楽しさが備わっていないといけないという授業を仕組むことができた。運動やスポーツをする楽しさが生徒の喜びや幸せにつながっていくことを実感させ、そのために何をしなければいけないかをしっかりと考えることができる授業展開であった。また、体育の授業だけでなく、日常生活にもつなげて考えることができている。

【現代的なリズムのダンスについて】

現代的なリズムのダンスでも、創作ダンスと同じように、自分たちで創り出し、考えることができる授業でないといけない。映像を見せて、その通りに踊るだけではダンスの授業にはならない。全部をオリジナルにすることは難しいが、今回の陽南中学校の授業のように、サビの部分は同じ動きにして、その他の部分は自分たちでオリジナルのダンスを創作することも一つの方法である。特に女子は「みんなで踊る、みんなで揃える」ことに楽しさを感じる生徒が多い。知らない動きを新たに覚えて、自分の動きにしていくことが、生徒の欲求を満たすことにつながることを今回の授業で感じた。

【創作ダンスについて】

学校全体の方針として、教師が生徒一人一人を大切に、生徒一人一人に寄り添う指導を大切にしていることが感じられる。だからこそ、本時の創作ダンスの授業でも生徒が自分を解放し安心して活動できる環境がよく表れていた。

生徒が動きたくなる題材や活動が仕組まれている。「生徒が楽しむ」だけでなく、「教師も楽しむ」こともできているからこそ、一体となって授業が創られている。そのための教材研究に思いが感じられる。

「ダンスに正解はない」という言葉通り、生徒一人一人が願いや思いをもって表現できている。グループ内だけでなく、どの仲間の前でも安心して表現できる雰囲気があり、即興でのドリル学習の場面でもいきている。ぜひ、各学校で実践を行っていただきたい。

4 成果と課題

(1) 成果

- 運動が上達する過程を「様相や姿」でとらえることや種目のもつ技術内容を構造的に分析し、基本的指導過程や単元の指導計画の作成し指導に当たったことで、運動技能を段階的に高めることができた。
- 段階的な指導やドリル練習で、生徒の発想を生かしたり、動きを高めるために教師が適切なアドバイスをしたりすることで、生徒は自らの力で動きを高めることができた。
- ペアやグループで互いの動きを評価したりタブレットやVTRを使って動きを評価する場を設定したりしたことで、多くの生徒が動きの高まりを実感することができた。
- 動きのよさやがんばりを認め合える場を設けたことで、学習集団としての高まりにつながることができた。

(2) 課題

- 動きを高めるためのより適切な教師のアドバイスができるよう、上達の過程に生じる「つまりぎ」をさらに明確にしていく必要がある。